横浜市立一本松小学校

学校だより

２月号

令和４年１月３１日
横浜市立一本松小学校
校　長　　髙桑　透

ヤマアラシのジレンマ

校長　　髙桑　透

寒さがますます厳しくなってきました。感染症の広がりがより身近なものとして感じられるようになりました。学校生活も引き続き感染症対策を徹底していきます。「三密」を避けるなど基本的なことはもちろん、十分な栄養と睡眠、適度な運動なども、しっかり意識して、丈夫な心と体を育てたいと思います。引き続きご協力をお願いいたします。

さて、みなさんはヤマアラシという動物を知っていますか。体中が針のような棘でおおわれてハリネズミと似ています。そのヤマアラシのまつわる話を紹介します。

> 真冬のある日、吹雪の中で、寒さに震える２匹のヤマアラシがいました。寒くて寒くてたまらないヤマアラシは、互いの身を寄せて温まろうとしました。ところがヤマアラシには棘があるので、体をくっつけてしまうと、相手に棘が刺さって、痛くてたまりません。かといって、痛いので体を離そうとすると、今度は、また寒くて凍えそうになってしまいます。
> くっついたり離れたりを繰り返すうちに、２匹は、ようやく「体は温まるけれどお互いの棘は刺さらない」くらいのちょうど良い距離を見つけました。

これは、ドイツの哲学者ショーペンハウアーの寓話が元になっていて「ヤマアラシのジレンマ」や「ハリネズミのジレンマ」と言われる話です。解釈はいくつかあるようですが、私には、「本当は傷つけずに温まりたいのに…」というヤマアラシの思いは、「本当は仲良くなりたいのに…」という気持ちを例えているように思います。親しい相手に対してつい嫌なことを言ってしまう、そしてけんかや衝突が起きて距離を置くようになると、けんかがなくなる一方で寂しさを感じやすくなるという矛盾＝ジレンマは、子どもも大人も経験のあることではないでしょうか。仲が良かったはずなのに、いつの間にか傷つけ合ってしまう、仲良くなりたいのによそよそしい関係になってしまうこともあります。実際のヤマアラシは、棘のない頭の部分を寄せ合って体温を保ったり睡眠をとったりしているそうですが、この話のヤマアラシは、どちらにとっても最善となる方法を探します。この行動がとても大切であり、難しいことです。「寒い、でも痛い、でも寒い…」と相反する思いや状況の板挟みの中で試行錯誤し、互いにとって心地よいと感じる距離をつかんだヤマアラシの姿＝かかわることをあきらめずに試行錯誤する姿こそジレンマの解決には不可欠だったと思います。

子どもたちには、あきらめたり投げ出したりせずに、友だちや家族など自分の周りの人とのかかわりを持ち続けてほしいと思います。「これくらいだとまだ痛いなあ…」「ここまで離れると温かくないし…」とヤマアラシたちが試行錯誤したように、ちょうど良い距離感を見つけるためにかかわり続ける中で、きっと、棘の長さが人によって違うことに気づいたり、傷ついた意味を理解することで痛みが次第に薄れることを知ったりすることができます。その経験や気づきにこそ、学びがあり、その過程で人は成長するのではないでしょうか。様々な活動を通して、仲を深めながら、仲間とかかわることを十分に経験し、よりよい人間関係を築くことができる子どもを育てていきたいと考えています。